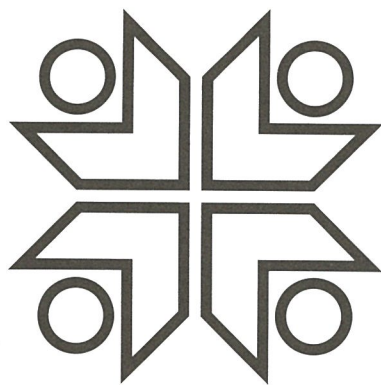


聖書 新共同訳について



財団法人 日本聖書協会

聖書 新共同訳について

1987年 9 月15日発行

©財団法人 日本聖書協会 東京

印刷・平版印刷

聖書 新共同訳について

1987

目次

はしがき	1
「聖書 新共同訳」翻訳の基本方針について	4
「聖書 新共同訳」の歩み	9
共同訳聖書実行委員会	
各委員会委員および翻訳者氏名	22

は し が き

一九七〇年八月二十七日、第一回共同訳聖書実行委員会が開かれ、共同訳の訳業は始まりました。これは前年の七月二十一日以降四回にわたって開かれ、聖書の共同翻訳の可能性について検討した、共同訳聖書可能性検討委員会の、「共同訳は必要かつ可能である」という答申をうけたものであります。以来十八年にわたってこの訳業は続けられてまいりましたが、ここによくその完成をみるに至りました。

その間、一九七五年に『ルカスによる福音』、一九七八年に『新約聖書 共同訳』、一九八三年に『詩編（抜粋）』、一九八四年に『ルツ記』『ヨナ書』『ヨブ記』を発行し、この訳業の経過を報告してまいりましたが、今回の『聖書 新共同訳』は、その成果の上に更に改訂を加え、これまで皆様の目に触れることのなかった他の諸書とあわせて発行するものであります。

十八年の歳月は長く、共同訳の完成を待ち望んでくださった方々には、大変ご迷惑をおかけしました。関係者一同、努力に努力を重ね、作業を進めてきましたが、聖書本文に対して慎重かつ厳密に接し、聖書の使信をわかりやすく、心に訴える力を持つて訳出し、教会の礼拝・典礼に用いられるにふさわしい気品を備えたものとするためには、これだけ

の時間が必要であつたと申し上げるほかありません。むしろこれだけの時間でこの訳業が完成したのは、多くの方々の祈りと励ましに支えられたこととともに、主なる神がこの訳業に臨み、恵みと導きを賜ったことによるものと信じます。

共同訳聖書の訳業の目的は、ただ単に新しい聖書の、翻訳・出版にとどまるものではありません。わたしたちは、この新しい聖書が普及し、この聖書を通して一人でも多くの人々が聖書の使信に触れ、わたしたちの主イエス・キリストを知るに至ることを望みます。主の御名の表記を「イエス・キリスト」から「イエス・キリスト」に改めたこと、翻訳方針を一部変更し、教会での使用にたえるものとしたことは、このためにほかありません。

一九七八年に出版した『新約聖書 共同訳』にわたしたちはこのように書きました。「一九六二年から六五年にかけて、バチカンで開催された第二バチカン公会議は、今世紀の初めからキリスト教会相互の間に推進されてきた教会再一致運動（エキュメニズム）の歴史に新たな地平を開く、重要な会議でありました。十六世紀以来、別々の道を歩んで来たカトリック教会とプロテスタント諸教会は、今や聖書に一致の基盤を見いだすとともに、力を合わせて聖書の真理を現代のすべての人に告げ知らせる責任を改めて強く自覚し始めました。再一致の運動は、単に分裂したキリスト教会の一致を目的とするのみでなく、最終的には全人類の一致と平和を希求する運動であります。わたくしたちは、聖書に示された

イエス・キリストこそ、全世界の主であり、人種や文化のあらゆる障壁を取り除く平和の主であると確信いたします。」この確信に基づいてわたしたちはこの訳業を続けてきました。そして、この『聖書 新共同訳』が完成した今、わたしたちはこの聖書が、エキユメニカルな会合の場だけでなく、カトリック、プロテスタントそれぞれの教会の典礼・礼拝において使われることで、この確信が証しされていくことを望むものであります。

これまで、各種の委員会において貢献された関係委員に感謝するとともに、背後にあつて祈りによつてわたしたちを支えてくださった多くの方々、また実際に聖書を製作するにあたつて力をかしてくださった、製紙会社、印刷所、製本所の方々、訳業にかかわるすべての分野において力をささげてくださった方々すべてに感謝いたします。

『聖書 新共同訳』と常にとともにあり、これを導き、完成に至らしめてくださった主なる神に感謝するとともに、この聖書を献げ、栄光を帰し奉る次第であります。

一九八七年九月十五日

共同訳聖書実行委員会

共同議長 平田 三郎
同 岸 千年

「聖書 新共同訳」翻訳の基本方針について

高橋 虔

カトリック、プロテスタントの共同訳聖書翻訳のことは、ただ単に日本だけで行われた訳業ではなく、それは全世界的な作業の一環をなすものである。従って世界各国における共同訳の基本方針も一定の取り決めがあり、もちろん各国の特別な事情もあるが、大体において聖書協会世界連盟 (United Bible Societies) と教皇庁のキリスト教一致推進事務局 (Secretariat for Promoting Christian Unity) とが連名で公表した「聖書翻訳におけるプロテスタントとカトリックの共同作業のための標準原則」(Guiding Principles for Interconfessional Cooperation in Translating the Bible, 1968) によって行われることになっている。この標準原則の和訳は、日本聖書協会発行の「聖書翻訳研究」第一号 (一九七〇年) に発表されている。そこに言われていることは「意味がよく通じ、しかも公衆の面前で朗誦できるような文章を目ざすべきである。それは教会の内の人にも外の人にも解ってもらえ、現代の言葉の用法をよく取り入れながらも使信の重大性にふさわしい充分気品のある文体でなくてはならない」とある。そのため今回の『聖書 新共同訳』翻訳の基本方針もそれに準拠していることは言うまでもない。

共同訳発足の時期では、大衆訳として「教会の外の人々」にも訴え得るナイダ博士の「動

的等価」の翻訳理論が重視されたが、後になって「教会の内の人々」にも容認されるような翻訳ということになり、従って敬語を多く用い、固有名詞の音訳はその定着度の高いものを採用することになった。

旧約聖書の文語訳においては、神名のエホバが用いられていたが、エホバまたはヤウエの訳語についても協議の末、七十人訳や聖書協会口語訳のように「主」と訳す方針を立てた。ただしヤウエにもヤハという短い形も四十回ほどあり、それらを明示することは不可能であり、創世記二十二・十四にはヤウエの音訳も出ている。イザヤ、エレミヤ、ハレルヤ等の「ヤ」はヤウエを指示している。

新約聖書のキリスト（クリストス）は、ヘブライ語のメシアのギリシア語訳であるが、従来の翻訳においてはこれをすべて一様にキリストと訳していた。今回の新共同訳においては、メシアの意味のキリストはすべてメシアと訳す方針を立てた。この方針は既にフランシスコ会訳の新約聖書においても採用されている。ヨハネによる福音書一・四十一の原文にはメシアの語がそのまま出ており、それにキリスト（クリストス）というギリシア語の訳語が付けられているが、新共同訳の訳文ではその「キリスト」は「油を注がれた者」という和訳となつて説明的に訳されている。

イエスの御名は、わが国においては、耶蘇、エス、イエズス、イイスス等に分かれてい

たが、今回は初めイエスと原音に近づける方針を立てたが、後に定着度を考慮しイエスに決定した。新約聖書にはイエスと同名の人物も数名あり（使十三・六のバルイエスをも加える）、底本に「イエス」とあっても明らかに旧約のヨシユアを指す場合はヨシユアとなっている（使七・四十五、ヘブ四・八）。イエスの祖先にもイエスという名の人があるが（ルカ三・二十九）、それもヨシユアとした。またバラバはイエスという別名を持つているので、これも底本に従ってバラバ・イエスとなっている（マタ二十七・十六、十七）。その他特記すべきことは、マルコによる福音書の終わりに、底本によって「結び二」が加えられているが、この部分には節の表示がなく特別扱いである。これは「短い補遺」とも呼ばれ、マルコによる福音書十六・九―二十の「結び一」すなわち「長い補遺」に対比されるべき部分で、共に古い写本に見いだされる。

「旧約続編」はプロテスタント教会ではアポクリファと呼ばれ、カトリック教会では第二正典として、正典の一部となっている。ただし、ギリシア語およびラテン語の両エズラ記と「マナセの祈り」はカトリック教会においても正典ではないので、これらの三文書は一括して別の場所にまとめられている。「続編」は一九三四年聖公会出版社により「旧約聖書続編」として出版され、後一九六八年に「アポクリファ（旧約聖書外典）」として改訂版が刊行された。それらは皆文語体であるが、今回初めて委員会訳による口語訳が完成された

のである。続編に出てくる固有名詞の訳し方についても多くの困難が伴っているが、そこには新共同訳旧新約の訳語との統一が計られている。

文語訳や口語訳に用いられていた献げ物についての名称も、レビ記七・三十七の「燔祭、素祭、罪祭、愆祭、任職祭、酬恩祭」などに関しては「焼き尽くす献げ物、穀物の献げ物、贖罪の献げ物、賠償の献げ物、任職の献げ物、和解の献げ物」と翻訳されている。聖書に出る動植物の訳語もその決定に困難を感じる場合が多く、大体は従来訳し方に従っているが、全体的に検討の結果改良が加えられている。マタイによる福音書六・二十八の「野のゆり」も「野生の花」から協会訳のように「野の花」になっている。ルカによる福音書には、「桑の木」(十七・六)と「いちじく桑」(十九・四)の区別もある。「いなご」にもいろいろの種別があり、「ばった」との区別も困難であるが、ヨエル書一・四の「かみ食らういなご、群がるいなご、とびいなご、滅ぼすいなご」は「かみ食らういなご、移住するいなご、若いいなご、食い荒らすいなご」となっている。その他動物名として「とき(鵪鶉)」(ヨブ三十八・三十六)、「ひひ」(王上十・二十二)の名も出ているが、「とき」も「ひひ」も古代エジプトの神トート(Thoth)との関連がある。「とき」の学名は「日本の鳥」であり、それは聖書と日本とを象徴的に結合させている。「猫」はエレミヤの手紙二十一節に一回だけ出ている。

完全無欠の翻訳はあり得ないが、聖書の真理は新しい翻訳によつて一層広く解明されることになるであらう。

「聖書 新共同訳」の歩み

B・シュナイダー

一 はじめに

日本聖書協会元総主事 宮内俊三牧師が書かれた“Towards a Common Bible(共同訳聖書を目ざして)” (*The Japan Christian Year Book 1968*, p. 175—177) の次の文章は、共同訳の歴史の幕開けを語っているものと言える。「聖書の翻訳、出版、頒布におけるローマ・カトリック教会と聖書協会の共同作業は、私の知る限りでは、ローマ・カトリック教会の呼びかけによって行われてきた。」

宮内元総主事が言われるように、世界的視野から見れば、共同訳の聖書翻訳運動は、ローマ・カトリック側から起こってきたものであるが、日本においては日本聖書協会側からの呼びかけによって始められ、ついには一九八七年九月五日に「聖書 新共同訳」が出版されることになった。

日本において初めて共同訳聖書の道が開かれたのは、一九六四年七月二十日、日本聖書協会がアメリカ聖書協会の翻訳部長ナイダ博士 (Dr. Eugene A. Nida) 他を迎えて、聖書翻訳についての協議会を開催したときにさかのぼる。そこにプロテスタント、ローマ・カトリック両教会の聖書学者たちが招かれたのである。その後、カトリックのフランシスコ

会聖書研究所が日本聖書協会やローマ・カトリック教会の代表を招いて、聖書翻訳についての共通の問題を討議するに至る。この集まりは、一九六五年一月十八日のことであった。次の呼びかけは、カトリックの司教協議会の中に誕生した二つの委員会、すなわちエキュメニズム委員会とキリスト教用語委員会によってなされた。

そのころ、日本聖書協会が一九五五年発行の口語訳聖書の改訂を考えていると聞いたカトリックのエキュメニズム委員会では、一九六五年六月九日開催の第一回委員会で、次のような提案がなされた。すなわち、このたびの改訂は、先にRSV (Revised Standard Version) が受け入れられたように、口語の改訂版をカトリックとして肯定的に受け入れることは出来ないだろうか、というものであった。それを受けて、フランシスコ会聖書研究所は十四五余りの意見を、同年六月二十四日開催の日本聖書協会理事會に提出したのである。同年七月九日、日本聖書協会翻訳部の代表者とフランシスコ会聖書研究所との合同會議が開催され、フランシスコ会聖書研究所が提出した改訂意見について討議し、問題を明確にした。この會議はなごやかな雰囲気のうちに行われ、四年後に単なる改訂ではなく、完全に新しい翻訳をしようという結論に達した。この事実には照らせば、この會議は今回新共同訳として実を結んだ共同作業への道を開いたものであったのであろう。

カトリックのキリスト教用語委員會は、聖書の固有名詞の問題にも関心を持っていた。

一九六〇年発行のカトリック教会の「公教要理」(カテキズム)の改訂版に引用される聖書本文の翻訳を進めるにあたって、フランススコ会聖書研究所は、司教会議の承認を得て、不一致のある固有名詞の表記は、日本で一般的に広く用いられている表記を採用するという方針をとった。採用した表記は、主として日本聖書協会の口語訳の表記で、カトリックの伝統的なものではなかった。この新しい方針を採用した結果、この微妙な問題において、九十パーセントの一致が実現し、このことがまた、新共同訳における百パーセントの一致への道を備えたのである。

このようにして、聖書の共同訳への種は蒔かれたのである。発芽を促すために土に水をやり、あとは神が育ててくださる、そのような機会が三週間にわたる、超教派的な国際翻訳セミナーとして実現したのである。このようなセミナーは初めてで、東京の郊外、八王子で一九六六年八月十五日から九月二日まで、聖書協会世界連盟の後援により、日本聖書協会が主催者、世話役となって開催された。このセミナーは、ナイダ博士の指導により進められ、アジアの十一の国々から五十五人が参加し、そのうちの三十人が日本からの参加者であった。日本の参加者の多くは後に共同訳のプロジェクトに加わった。

このセミナーをうけて、聖書の共同訳の可能性についての検討会が、一九六七年四月十日、日本聖書協会の主催のもとにフランススコ会聖書研究所で開かれた。この集まりには、

八王子のセミナーの参加者のうち二十余名と日本聖書協会の口語訳聖書翻訳に携わった聖書翻訳の経験者数名が集まった。この集まりにおいて、共同訳のプロジェクト創設への強い希望が出された。そのために、まず固有名詞の表記や用語の統一を図ることが必要であること、そしてその準備のための研究を始めることが討議された。その結果、日本聖書協会により日本聖書翻訳研究会が組織され、その第一回総会は一九六九年七月二十二日に開かれた。同研究会は年二回開催され、機関誌も年二回発行されるようになった。

二 共同訳翻訳の第一段階

これら二つの会合の間に、非公式な集まりがオリエンズ宗教研究所で開かれ、ショーター・バイブルの可能性などについて話し合われたが、聖書全文の共同訳を目指すことを合意した。一九六九年春、日本聖書協会は、当時カトリック協会のエキュメニズム委員会の議長であった伊藤庄治郎司教を通して、カトリック司教団に、新しい聖書の翻訳に参加するよう要請した。すなわち日本聖書協会は二つの共同委員会の設置についてカトリック司教協議会に協力を要請したのである。一つは、カトリックとプロテスタントで不統一な用語、特に固有名詞表記の調整を検討するための委員会であり、もう一つは共同訳の実現の可能性について検討し答申するための委員会である。カトリック司教団は聖書協会のこ

の要請を一九六九年五月の会合で受け入れ、これら二つの委員会は、同年七月二十一日、銀座の日本聖書協会に集まった。

聖書訳語委員会は、北海道から九州に至る各地から集まった十人の聖書学者たちで構成され、その後の十年間に五十回以上の会合をもち、一九八三年十一月二日の第七十一回まで定期的に開催された。この委員会は実際の翻訳が開始された後は、共同訳聖書実行委員会の中に組み込まれた。

もう一つの準備委員会である共同訳聖書可能性検討委員会は、十五名で構成され、日本において共同訳がはたして可能かどうかを検討して答申することが目的であった。一年の間に四回にわたって研究した末、宣教のためにも必要であるという観点から、共同訳の聖書が可能であるばかりでなく、必要であるという答申を全会一致でなしたのである。さらにこの委員会は、このプロジェクトを開始し推進するためにプロテスタントとカトリック五名ずつで成る十名の実行委員会を作ること、また「聖書翻訳におけるプロテスタントとカトリックの共同作業のための標準原則」に準拠して、共同訳の作業を進めることを勧告した。この原則は、聖書協会世界連盟と教皇庁のキリスト教一致推進事務局により、一九六八年の聖霊降臨祭の日にロンドンとローマで同時に発表されたものである。

三 翻訳作業の組織

この勧告に基づき、カトリック司教団と日本聖書協会は一九七〇年五月と六月、それぞれ五名の委員を選出して、共同訳聖書実行委員会を組織した。第一回委員会は、一九七〇年八月二十七日に開催され、共同議長として元日本福音ルーテル教会議長、日本聖書協合理事長岸千年牧師と、カトリック名古屋司教区の相馬信夫司教を選出した。相馬司教は、一九七四年五月、福岡司教区の平田三郎司教と交替された。実行委員会のメンバーの中であらう一人の協会指導者は、日本聖公会東京教区の後藤真主教で、後に山田襄主教に交替された。

一方、一九七〇年七月、共同訳の中核になる六名のプロテスタントと、五名のカトリックの聖書学者たちが、台湾の台中で四週間にわたり開催された、第二回国際翻訳者セミナーに参加した。一九七一年十一月には、翻訳者に予定されている人々の二日間の集中翻訳セミナーが八王子で開催され、全世界で広く用いられている *Good News Bible* の翻訳の中心者であるブラッチャー博士 (Dr. Robert G. Bratcher) がその翻訳の基本方針や翻訳作業の際に生じた問題点について述べ、指導された。

第一回の全体の協議会は一九七二年六月二十七日から二十九日まで、富士山に近い河口湖畔の日本出版クラブ研修センターで開催された。後には四十五名になる翻訳者のうち、

二十四名の翻訳者たちが出席した。翻訳者たちは、三つのグループに分けられた。すなわち、新約部会、（ヘブライ語）旧約部会、そして旧約続編部会であり、それぞれプロテストント、カトリック双方の翻訳者が含まれていた。

三つの部会は、担当部分の内容の類似点や関連性を考慮して、さらに小さなグループに分けられ、討議を続けながら原稿の第一段階の検討を行った。新約部会、旧約部会にはそれぞれ五つの小グループ、続編部会には三つのグループが組織された。編集委員会は、この三部会のそれぞれに組織され、編集委員は翻訳者の中から新約部会は四名、後に五名、旧約部会は最初に七名、後に九名、続編部会は四名が選ばれた。これら各部会の編集委員のうち、それぞれ二名、五名、二名の編集実務委員が最終原稿を作成した。編集作業全体のとりまとめはカトリック、プロテスタントそれぞれ一名ずつの、翻訳者でない共同編集委員長がとりおこなった。ただし、共同委員長は、共同訳聖書実行委員会、聖書訳語委員会それぞれのメンバーでもある。

四 これまでの出版、そしてなぜ「新共同訳」であるか

パイロット版として「ルカによる福音」が出版されたのは、一九七五年で、続いて一九七八年「新約聖書 共同訳」が出版された。さらに旧約聖書のパイロット版として、一

一九八三年に百五十編中の五十編をのせた「詩編 抜粋」が、一九八四年には「ヨブ記」「ルツ記」「ヨナ書」がそれぞれ分冊として出版された。

一九八七年九月五日は、全体が完成した「聖書 新共同訳」出版の日である。その序文の終わりに、共同訳の旧約聖書および続編の出版は今回が最初であるにもかかわらず、なぜ「新共同訳」という名称になったかの理由が三つ述べられている。その三つを概観すると、第一に、新約聖書の部分が一九七八年の「新約聖書 共同訳」と比べて全く新しくなったと言えることである。第二に、旧新約両聖書の固有名詞表記が、一九七六年出版の新約聖書の固有名詞リスト、同じく一九八〇年の旧約聖書の固有名詞リストから著しく変わったこと。一九八三年に、一般の慣用が定着した固有名詞については、それを尊重するという方針が取り決められた。第三に、「新約聖書 共同訳」や、旧約聖書の翻訳第一原稿は、日本の九十九パーセントにのぼる非キリスト教徒を対象に翻訳されたものであり、教会の礼拝や典礼に用いられることを志したものではなかった。しかし「新共同訳」では、教会での使用を念頭においている。つまり、非キリスト者に聖書が受け入れられるためには、一人でも、また教会の礼拝、典礼においても聖書によつてはぐくみ育てられると信じキリスト者を通して伝えられていくのが最善であると考えたためである。

五 一つの聖書Ⅱ二種類の出版

「聖書 新共同訳」は、二つの種類の出版がなされる。一方は「旧約聖書続編」が付いているものであり、他は付いていないものである。続編とは、一般には第二正典／アポクリファとして知られているもので、「新共同訳」では（ヘブライ語）旧約聖書と新約聖書の間に置かれている。

続編は、プロテスタントでは、すべてアポクリファと呼んでいるものであり、カトリックでは、そのうちの三書を除くすべてを第二正典と呼んでいる。

カトリックの正典では、第二正典のうち七書は独立した書であり、旧約聖書の各部分に収められている。すなわち、トビト記、ユデイト記、マカバイ記一・二、知恵の書、シラ書、バルク書である。

また、第二正典の他のものは、旧約聖書の他の書の一部として置かれている。すなわち、ヘブライ語エステル記へのギリシア語の補遺、ダニエル書の三つの補遺①アザルヤの祈りと三人の若者の賛歌（ウルガタの三章二十四―九十節）②スザンナ（十三章）③ベルと竜（十四章）、エレミヤの手紙（バルク書六章）である。「新共同訳」では、前述の「聖書翻訳におけるプロテスタントとカトリックの共同作業のための標準原則」に従って、エステル記の場合は、補遺だけでなくギリシア語本文全文を訳し、続編の中に置いた。またダニエ

ル書の補遺とエレミヤの手紙も、別の項目として、続編に置かれている。

続編の他の三書は、エズラ記（ギリシア語）、エズラ記（ラテン語）、マナセの祈り（これは歴代誌下三十三章十二、十三節参照）は、カトリックもプロテスタントもアポクリファという名称で一致している点で他と異なる書である。これらの書は第二バチカン公会議まで、公式のラテン語ウルガタ聖書に付録として含まれ、新約聖書の終わりに、小さな活字で印刷されていた。「新共同訳」では、この三書を他と区別するため、間に白紙を入れている。エズラ記はヘブライ語のものが旧約聖書の中にあるので、続編のエズラ記は括弧内にそれぞれの原語を付して「エズラ記（ギリシア語）」「エズラ記（ラテン語）」とした。この三書がプロテスタントでもカトリックでもアポクリファであるにもかかわらず、続編に入れられたのは、ある教会が、これらを礼拝に用いているためである。歴史的にも一六一一年の欽定訳（King James Version）では、アポクリファの中に、一六〇九年のカトリックの英語版 Douai 訳にも付録として、また一五三四年のルター訳聖書のアポクリファの中に、それぞれ含まれていた。

六 読者のための手引

一九八七年の「聖書 新共同訳」の初版には、脚注が付いていない。その代わり、通常、

脚注で説明される内容のために以下の五つの付録が、付けられている。

「聖書について」 聖書の全般的な紹介および、旧約、旧約続編、新約各書の分類や内容の簡潔な説明。

「用語解説」 百三十二の聖書に特有な用語の解説。また、語の理解に必要な引用箇所および関連箇所が記されている。

「旧約聖書 章・節対照表」 底本のヘブライ語聖書と日本聖書協会口語訳聖書の章・節数字の相違についての対照表。

「新約聖書における旧約聖書からの引用箇所一覧」 新約聖書中に引用された旧約聖書の個所の一覧表。なお、ヘブライ語テキストからではなくギリシア語七十人訳からの引用についてはその旨の表示がある。

「度量衡および通貨」 四十五にのぼる度量衡および通貨単位を五十音順に並べた用語集。

巻頭の序文に続いて、凡例を付した。これらは説明的な符号や略号、記号の説明であり、読者の理解を助けるためのものである。例えば、「洗礼」という言葉を、「せんれい」ある

いは「バプテスマ」と、読者の選択により、どちらでも読めるようにしている工夫などについて説明している。

同様に、新約聖書のダガー・マーク（†）は、翻訳の底本とした校訂本のテキストに欠けている節である。これらの節はその書の末尾に異本による訳文を付してある。なお最後にはヘブライ語・ギリシア語・ラテン語それぞれの翻訳の底本を紹介している。また訳文は小見出しによって区切られているが、原則として、小見出しの言葉は訳文自体から取られている。小見出しの下括弧内には、並行個所が表示されている。

七 新共同訳発行の意義

「聖書 新共同訳」の発刊が、日本における最初の完全な翻訳聖書が出版されてちょうど百年目にあたる一九八七年になされるというのも意義深い。最初の日本語聖書は、スコットランド聖書協会、アメリカ聖書協会、英国聖書協会などの協力により、一八八七年に完成した。それから百年を経て、「聖書 新共同訳」は、日本聖書協会と日本カトリック司教協議会の協力により完成した。この協力の意義については、このプロジェクトの後援団体の一つである、ドイツ・シュトゥットガルトにあるカトリック聖書使徒職世界連盟（World Catholic Federation for the Bible Apostolate）から「新約聖書 共同訳」出版の際によ

せられた文章に明らかである。その書簡を部分的に引用すれば次のようになる。

「この共同作業は、相互の信頼と望みの証しであり、日本のキリスト教会の歴史に大きな足跡を残すものであります。七年〔今は十八年ですが〕にわたる学問的、また経済的な協力は、今後の日本における教会一致の新しい幕開けを予言し、証しするものであります。」

この「聖書 新共同訳」が「テサロニケの信徒への手紙二」三章一節の「主の言葉が、あなたがたのところでそうであつたように、速やかに宣べ伝えられ、あがめられるように」という祈りに応えるものとなりますように。

共同訳聖書実行委員会

各委員会委員および翻訳者氏名

(アルファベット順)

共同訳聖書実行委員会 共同議長

- 平田 三郎 (カトリック司教・福岡教区長)
〔一九七四・五月就任〕
- 岸 千 年 (財団法人日本聖書協合理事長)
〔一九七四・五月退任〕
- 相馬 信 夫 (カトリック司教・名古屋教区長)
〔一九七四・五月退任〕

共同訳聖書実行委員会 委員

- 後藤 真 (日本聖公会元東京教区主教)
〔一九八二・四月退任〕
- 小出 忍 (東京聖書学校校長)
〔一九八一・一月就任〕
- 前田 護 郎 (東京大学名誉教授)
〔一九八〇・四月没〕
- P・ネメシエギ (上智大学教授)
- B・シュナイダー (フランチスコ会聖書研究所所長)
- 高橋 虔 (同志社大学名誉教授)
〔一九八二・四月就任〕
- 竹森 満佐一 (東京神学大学名誉教授)
〔一九八二・四月退任〕
- 寺西 英 夫 (カトリック東京教区司祭)
〔一九八二・四月就任〕
- 東ヶ崎 潔 (元国際ロータリークラブ会長)
〔一九八二・四月就任〕
- 山田 襄 (日本聖公会東京教区主教)
〔一九八二・四月就任〕
- Z・イエール (サンスルピス大神学院教授)

検討委員

有賀 鉄太郎 (京都大学名誉教授)

〔一九七七・五月没〕

相浦 忠雄 (関西学院大学名誉教授)

〔一九七九・六月就任〕

浅井 正三 (札幌カトリックセンター司祭)

木下 順治 (日本基督教会牧師)

前川 登 (東京純心女子短大教授)

〔一九七八・一〇月就任〕

松本 治三郎 (関西学院大学名誉教授)

水谷 九郎 (カトリック東京教区司祭)

中沢 洽樹 (立教大学名誉教授)

〔一九八二・四月退任〕

小嶋 潤 (元静岡英和女学院短大学長)

左近 義慈 (東京神学大学名誉教授)

沢田 和夫 (カトリック司祭・東京神学院)

〔一九七八・一〇月退任〕

国語委員

林 巨樹 (青山学院大学教授)

菅野 謙 (大正大学教授)

森岡 健二 (上智大学教授)

永野 賢 (東京学芸大学名誉教授)

小川 国夫 (作家)

阪田 寛夫 (作家)

編集委員会 共同委員長

B・シュナイダー（実行委員会委員）

高橋 虔（実行委員会委員）

翻訳者（氏名の上の○印は編集委員兼任を示す）

○秋 吉 輝 雄（立教女学院短大教授）

○荒 井 章 三（松陰女子学院大学教授）

古 谷 功（カトリック横浜教区司祭）

○生 原 優（日本基督教団牧師）

橋 本 滋 男（同志社大学教授）

秦 剛 平（多摩美術大学助教授）

○速 水 敏 彦（立教大学文学部長）

○林 嗣 夫（日本基督教会牧師）

○堀 田 雄 康（清泉女子大学教授）

法 用 涉（日本聖公会中部教区主教）

○本 田 哲 郎（フランススコ会日本管区長）

○石 川 康 輔（サレジオ会司祭）

今 道 瑤 子（聖パウロ女子修道会修道女）

加 納 政 弘（日本バプテスト同盟牧師）

川 村 輝 典（東京女子大学教授）

- 川 島 貞 雄（日本聖書神学校教授）
- 木 田 献 一（立教大学教授）
- 清 重 尚 弘（日本ルーテル神学大学学長）
- 小 平 卓 保（鹿児島純心女子短大教授）
- 増 田 早 苗（聖心会修道女）
- 松 永 希久夫（東京神学大学教授）
- 三 好 迪（弘前大学教授）
- 水 谷 博 彦（日本聖公会司祭）
- 森 紀 旦（日本聖公会司祭）
- 鍋 谷 堯 爾（神戸ルーテル神学校校長）
- 中 村 克 孝（日本ルーテル神学大学教授）
- 中 村 和 夫（西南学院大学教授）
- 西 村 俊 昭（日本基督教団牧師）
- 野 本 真 也（同志社大学教授）
- 大 串 元 亮（東京神学大学講師）
- 大 野 恵 正（活水女子大学教授）
- 太 田 道 子（真生会館聖書センター研究員）
- 左 近 淑（東京神学大学学長）
- 里 野 泰 昭（千葉大学教授）
- 柴 田 千頭男（日本ルーテル神学大学教授）

○島田和人(福良キリスト教会牧師)

新見宏(元財団法人日本聖書協会総主事)

〔一九七九・十二月没〕

菅沼英二(酪農学園大学教授)

○高橋重幸(トラピスト修道会司祭)

高橋敬基(日本基督教団牧師)

時田光彦(西南女学院短大教授)

○十時英二(東洋英和女学院短大教授)

宇佐美公史(上智大学助教授)

○和田幹男(英知大学教授)

吉田泰(明治学院大学教授)

聖書訳語委員会 委員

生原優 前川登

秦剛 左近淑

堀田雄康 B・シュナイダー

木田献一 高橋虔

清重尚弘 高橋重幸

中村和夫 Z・イエール



ISBN4-8202-9001-0 C0016-¥100E ¥100

発行所 東京都中央区銀座4-5-1 財団法人 日本聖書協会